

今日から3章の終わりまで、小アジアの七つの教会(1章11節)に向けて充てられた手紙の内容に入る。先頭に出てくるのは「エフェソにある教会」。

エフェソの教会も含め、各教会に充てられた手紙の内容を理解するためには、各教会が置かれていた時代的、文化的、宗教的背景に触れることは大切であろう。

1世紀のエフェソがどのような都市であったか。エフェソは小アジア(現在のトルコ西岸)におけるローマ帝国の主要な港町であり、2つの主要な陸路が交差する、人口25万人を超えていたと推定される、極めて国際的かつ商業的に繁栄した大都市であった。

教的には、世界七不思議の一つに数えられた「アルテミス神殿」の所在地として有名であり、都市の経済そのものがこの異教礼拝に依存していた。使徒言行録19章で、銀細工人がパウロの宣教によって暴動を起こしたことからもわかる)。また、エフェソは魔術やオカルトの中心地としても知られており(使徒19:19)、皇帝礼拝の神殿も建設されるなど、あらゆる偶像礼拝と世俗的価値観が渦巻く都市であった。

この異教的で道徳的に退廃した巨大都市の中で、エフェソのキリスト者たちは、パウロやテモテ、そして使徒ヨハネ自身の牧会を受けながら、約40年以上にわたって教理的純粋性を守り抜いていた。しかし、その厳しい戦いの歴史が、彼らの内面に一つの致命的な病理を生み出してしまったのである。

1節。「右の手に七つの星を持つ方、七つの金の燭台の間を歩く方が、次のように言われる。」

キリストはご自身を、星を握り、燭台の間を歩く方として提示する。「星」とは教会の天使(指導者や教会員たち。1章20節)であり、それを力強く「持つ(κρατέω、クラテオ)」ことは、教会の存続と保護が、ローマ帝国や異教の力ではなく、完全にキリストの主権下にあることを示している。また、燭台の間を「歩く(περιπατέω、ペリパテオ)」ことは、キリストが遠く離れた天から傍観しているのではなく、異教社会で戦う教会のただ中に今も臨在し、彼らの働きと心の奥底の動機を一つ残らず見察しておられることを意味する。

2-3節。「わたしは、あなたの行いと労苦と忍耐を知っており、また、あなたが悪者どもに我慢できず、自ら使徒と称して実はそうでない者どもを調べ、彼らのうそを

見抜いたことも知っている。あなたはよく忍耐して、わたしの名のために我慢し、疲れ果てることがなかった。」

キリストはまず、エフェソ教会の素晴らしい点を最大限に賞賛する。彼らの「労苦（κόπος、コポス）」とは、限界まで疲れ果てるほどの極限の奉仕であり、「忍耐（ύπομονή、ヒュポモネー）」とは、異教社会の迫害や圧力のただ中で積極的に信仰を貫く強さである。エフェソ教会は、かつてパウロが「わたしが去った後、残忍な狼どもがあなたがたのところへ入り込んで来て群れを荒らすことが、わたしには分かっています」（使徒 20:29）と警告した通り、偽りの教えの脅威に直面していた。しかし彼らは、自らを使徒と称する者たちの教えを聖書の真理に照らして厳密に「調べ（πειράζω、ペイラゾー（to test）」、教会から悪を退ける卓越した識別力と毅然とした態度を持っていた。彼らは、真理を守るだけの神学的知識があったのであろう。

4節。「しかし、あなたに言うべきことがある。あなたは初めのころの愛から離れてしまった。」

完璧と言えるほど奉仕と教理的に徹底していたエフェソの教会であったが、しかし、そこに大きな欠けがあった。それは、教理の誤りでも道徳的墮落でもなく、「愛の喪失」であった。「初めのころの愛」とは、彼らが救われた当初に持っていた、キリストご自身に対する圧倒的な感謝と情熱、そしてそこから自然と溢れ出していた兄弟姉妹や隣人への純粋な愛である。異端や偽教師と戦い、正しさを守り抜こうとする長年の激しい緊張感の中で、彼らはいつしか他者に対して批判的になり、寛容さを失っていた。神学的な正確さと宗教的な義務感が、キリストへの純粋な愛に取って代わっていたのである。正しいことを行いながらも心が冷え切っている状態、すなわち「愛なき正統主義」は、教会にとって霊的な死の兆候である。

5節。「だから、どこから落ちたかを思い出し、悔い改めて初めのころの行いに立ち戻れ。もし悔い改めなければ、わたしはあなたのところへ行って、あなたの燭台をその場所から取りのけてしまおう。」

キリストはこれを単なる「マンネリ化」として片付けず、明確な罪として取りあげ、直ちに回復するための3つのステップを命じる。

1. 思い出す：自分たちがかつてどれほど神の恵みに溢れ、喜びに満ちていたか、その霊的な高みから今どれほど滑り落ちてしまったかを自覚すること。
2. 悔い改める：正しい教理の背後にある自分の冷酷さや義務感を「罪」として告白し、方向転換すること。

3. 初めのころの行いに立ち戻る:キリストと隣人を愛する具体的な行動を再び開始すること。

もしこれを拒むなら、「燭台をその場所から取りのける」という最も恐ろしい裁きが下される。「燭台」は、教会が世を照らす「証しの光」の象徴。つまり、どれほど正しい教理を掲げていても、愛を失った教会はもはやこの世の暗闇を照らす光とはならず、キリストご自身によってその存在意義(教会としての役割)を剥奪されるという厳粛な警告である。

6節。「だが、あなたには取り柄もある。ニコライ派の者たちの行いを憎んでいることだ。わたしもそれを憎んでいる。」

厳しい叱責の後、キリストは再び彼らを励ます。「ニコライ派」が何であるかははっきりしないが、おそらく、神の恵みやキリスト者の自由を口実に、アルテミス神殿での宴会への参加(偶像礼拝)や性的不品行を信者たちに推奨し、彼らを霊的に支配しようとした異端のグループのようである。エフェソ教会は、異教社会の圧力に妥協することなく、キリストが憎まれる罪を同じ心で憎む憎しみを共有していた。これは人間的な悪意ではなく、神の聖さに基づく健全な価値基準である。

7節。「耳ある者は、“霊”が諸教会に告げることを聞くがよい。勝利を得る者には、神の楽園にある命の木の実を食べさせよう。』

これはエフェソ教会だけでなく、全時代の「諸教会」に対する普遍的な呼びかけである。キリストの恵みによって自己の罪を悔い改め、愛を取り戻し、最後まで世の妥協に打ち勝つ「勝利を得る者」には、最高の報いが約束されています。

「神の楽園にある命の木の実」とは、創世記においてアダムとエバが罪によって失ったエデンの園の祝福、すなわち「神との完全で親密な交わり」と「永遠の命」の終末論的な回復を意味する。私たちの地上の教会における戦いと悔い改めの歩みは、この新しい天と新しい地における栄光の完成へと確実に繋がっている。

今日のところは以上であるが、最後に、ここから私たちに語りかけるメッセージを聴きとりたい。

エフェソにある教会への手紙は、現代を生きるキリスト者と教会に対する極めて実践的で、かつ心探られるメッセージである。現代の教会もまた、世俗主義や多様な価値観が渦巻く社会の中で、聖書の真理を懸命に守ろうとしている。私たちは、誤った教えや時代に迎合する風潮に対して「ノー」と言い、正しい教理を堅く守り抜く必要がある。エ

フェソ教会が偽使徒やニコライ派を退けたように、真理のための労苦と忍耐は、主から大いに賞賛されるべき美德である。

しかし、主イエス・キリストは、私たちが「正しさ」を追求するあまり、最も重要なものを失う危険性について厳しく警告しておられる。それが「初めのころの愛からの離脱」である。私たちは、神学的な正しさや異端への警戒心を強めるあまり、いつの間にか他者を裁く冷たい心を持ってはいないか。教会での奉仕や活動が、救われたばかりのころの「キリストへの溢れる感謝と喜び」からではなく、「義務感」「惰性」あるいは「自分が正しいことの証明」へとすり替わっていないか。

「愛なしにはキリスト者はキリスト者たりえず、愛なしには教会は教会たりえない」。どれほど正統的な教理を持ち、どれほど教会活動に熱心であっても、そこに「神への愛」と「隣人への愛」がなければ、それは命のない骸(むくろ)に過ぎない。愛を失った正しさは、やがて独善となり、世の光としての「燭台」の役割を失わせる。

キリストは私たち一人ひとりに語り掛けておられる。

「どこから落ちたかを思い出し、悔い改めて初めのころの行いに立ち戻れ。」

これは、過去の感情的な高揚を無理に取り戻せという命令ではない。私たちがどれほど深い罪の中から、キリストの十字架の血潮によって一方的に赦され、愛されたかという「十字架の原点」に立ち返りなさい、という招きある。

私たちは常に吟味しなければならない。私たちの手が行っている奉仕は、キリストへの純粋な愛から動機づけられているのだろうか。もし心が冷え切っていることに気づいたなら、素直にそれを罪として主の前に告白しよう。主は、私たちが悔い改めて立ち帰ることを誰よりも待ち望んでおられる。初めの愛に根ざした歩みを全うする者には、神の樂園における永遠の命と、尽きることのない喜びの交わりが約束されている。